名古屋大学博物館報告
Bull. Nagoya Univ. Museum
No. 32, 47–62, 2017
DOI: 10.18999/bulnum.032.06

# 植民地期朝鮮における創作版画の展開（4）
# ―仁川における佐藤米次郎の創作版画活動と時局下の蔵書票展の開催について―

# The Development of ‘Sosaku Hanga (modern woodblock prints)’ in Korea during the period of Japanese colonization―Part4: promotional activities of Yonejirou Satou in Incheon and holding of the exlibris exhibition in view of the political climate.

辻（川瀬）　千春（TSUJI (KAWASE) Chiharu）

〒485-8565 愛知県小牧市大草愛知文教大学
Aichi Bunkyou University, Okusa, Komaki, Aichi 485-8565, Japan

**要旨**

1940年1月に青森から仁川に移住した版画家佐藤米次郎（1915–2003）は，創作版画の普及活動を仁川を拠点として積極的に展開した．その一環として時局下に京城で企画した蔵書票展覧会では，日本の錚々たる版画家の作品を展示し「小品美術展」と位置付け，また佐藤が移住後に知己となった，朝鮮在住の日本人による版画作品も展示したことを明らかにした．佐藤は植民地朝鮮において版画創作や版画を伴う児童文学の普及活動を通して人脈を広げて行ったが，その活動に朝鮮人の参加は見られず，一貫して日本人のネットワークにとどまっていた．それは，佐藤の創作版画活動が，決戦下に当局側が期待した植民統治の役割を負わず，郷土日本に根差した創作版画の味わいを真髄とした純粋な芸術活動として展開し続けたことの証左であった．

**Abstract**

After Yonejirou Satou (1915–2003) moved to Incheon, Korea under Japanese rule, from Aomori in January, 1940, he developed the promotional activity of ‘Sosaku Hanga’ aggressively. He planned the exlibris exhibition in view of the political climate as the part of the activity. He did not follow the request of the government to use Hanga to unify the will of the people following the victory in war. He developed the activity as private artistic pursuit.

## 0．はじめに

本研究の端緒は，2005年に名古屋大学博物館が「個別の作品だけで3000点をはるかに越す樋田（直人：1926–2012）国際蔵書票コレクション」（西川，2007）の寄贈を受けて立ち上げた名古屋大学の教員を中心とする蔵書票研究会の一員として，筆者が台湾及び韓国の蔵書票の研究を担当したことであった．台湾における蔵書票は，日本の植民統治期（1895–1945）に日本人の文学者や愛書家が，日本本土と比肩する台湾の文学を築こうと展開した文学活動の中で同時的に広められた（辻，2006）．戦後しばらくの間は台湾の蔵書票は政治的な混乱等により表面化することはなかったが，台湾の愛書家によって密かに継承され，1990年代初めに再び注目されるようになり，今日まで続く教育活動として展開している（辻，2007）．その研究過程において，日本の植民統治下にある朝鮮（1910–1945）においても，版画家佐藤米次郎（1915–2003）が日本本土でも実現していない本格的な蔵書票展を開催していたことが明らかになっ

たことは，朝鮮においても台湾と同様の蔵書票の広がりがあることを推測させた．しかしながら，日韓両国において韓国の近代美術史の検討が始まったのが，漸く1990年代になってからであった．ただそこに蔵書票の主な制作手法である版画は対象とされておらず，朝鮮美展やそれに関係する朝鮮人の美術家等や，彼らによる版画を除く西洋画や日本画などの作品について，日本との関わりを踏まえた研究成果が確認されるばかりであった．2000年代半ばごろになって韓国でも同時期の版画の展開について，出版文化史的観点から韓国近代版画と位置付けられ認知されるようになったが（金鎮夏，2007），それに関わった日本人の活動の展開等についての論考は日韓両国においてほとんど見出すことはできず，まさに空白の美術史といえた．そこで，そもそも日本の蔵書票の特徴である板目による多色木版を包含する創作版画自体が，植民地期朝鮮ではどのような広がりを見せていたかを解明することが先決であると思われた．

このような見地から筆者はこれまでの調査（辻，2015；2016a, b）で，京城（現・ソウル）で発行された朝鮮総督府機関紙『京城日報』（京城日報社，1915–1945）を主な分析対象として，主に京城に居住する日本人の美術家等による創作版画活動や日本からの来訪美術家による活動を明かした．1930年前後には，同地における唯一の創作版画の活動団体である朝鮮創作版画会が，京城日報社記者で美術家の多田毅三（生没不詳）を中核として普及活動を展開した（辻，2016a）．彼らは，植民地朝鮮を立脚地とした新たな朝鮮の芸術として創作版画を意義づけた．一方1940年前後には，日本本土から日本的なるものとして京城に「日本版画」が持ち込まれ，日本固有の日本人の文化を担うという意義を負い普及が企てられた（辻，2016b）．

さて本稿では，1940年に青森から仁川に移住した佐藤米次郎が，1944年の応召まで仁川を拠点として展開した版画の創作や普及活動について解明する．またそうした普及活動の一環として1941年に米次郎が企画した京城における蔵書票展の開催の経緯や，これまで米次郎の手記に依ってきた展覧内容等についても，同展の招待状（佐藤，1941b）や出陳目録（佐藤，1941c）等の分析により明らかにする．そして最後に，米次郎によるこうした一連の創作版画活動がどのような意義で展開したか，当局側の反応等を踏まえて考察する．

なお，本報告では，植民統治下における当該地域を研究対象としており，一部不適切な当時の呼称等もあえてその時代を指すものとして「」を付さずにそのまま用いている．ただし朝鮮美術展覧会の略称は朝鮮美展を採用するが，引用文においては鮮展という表現を原文のまま用いた．新聞からの引用は，例えば「(『京城日報』，年.月.日)」等とする．掲載図版のキャプションについては，題目，作者，制作年，(掲載紙誌等)，所蔵者の順に記した．

## 1．佐藤米太郎・米次郎兄弟の仁川移住と仁川における創作版画活動の展開

佐藤米次郎は，出身地青森の中学に在学中から版画をはじめ，同人誌を刊行し，14歳の時に蔵書票の権威である斉藤昌三（1887–1961）が著した『蔵書票の話』（斉藤，1929）に出会ったことで兄米太郎（1912–1958：版画家）と共に蔵書票の世界にのめり込んでいった（佐藤，1988）．すでに青森時代に佐藤兄弟は，自宅を作業場として版画の同人誌を刊行する等，版画を創作し，美術活動を行っていた（佐藤，1988）．そして1931年半ばに先に仁川に移住した兄米太郎の勧めで，米次郎も1940年1月に同地に移住し，知人の紹介で「朝鮮製鋼所営業部」において，PR紙やパンフレットの作成の職を得た（佐藤，1989）．1943年9月には「朝鮮海陸運輸株式会社仁川支店」の店員と記している（佐藤，1943）．

弟米次郎に先立って仁川に移住した兄米太郎の創作版画活動については，仁川移住当初から弟米次郎が青森で主宰する創作版画誌を中心に，朝鮮の風俗や風景を描いた版画作品を積極的に発表している（注1）．まず，同地の風俗を捉えた「朝鮮の便り」を移住の翌年1932年12月に，米次郎が主宰する創

作版画誌『彫刻刀』（1933年1月から『陸奥駒』に改題）第17号（佐藤，1932）に寄せている．さらに翌年1月に，本図を「朝鮮女」と改題して，版画誌の刊行によって版画家の育成に尽力した古美術研究家であり版画家の料治朝鳴（1899–1982）が編輯･刊行する『白と黒』第31号（料治，1933）に寄せている（図1）．

兄米太郎が『陸奥駒』第17号（佐藤米次郎，1935）に発表した作品（図2）に添えた「作者の言葉」には，本作が仁川の海浜のスケッチであることを解説し，さらに「内地と違って版画材料が乏しくて制作に些か支障を来しますが，大いに朝鮮の風景，風俗をスケッチし版画として『陸奥駒』に発表します」（佐藤米太郎，1935）と意気込みをみせている．

**図1.** 朝鮮女，佐藤米太郎，1933，（料治朝鳴，1933）東京都現代美術館蔵．

兄米太郎が日本本土の展覧会に出陳するのは，1940年に弟米次郎が仁川に移住し版画の創作を始動するのと同時期であった．1940年国画展第15回に「洗濯婦女」を出陳し，その後同第18回「夏日」，第19回「朝風」を出陳した（東京文化財研究所，2006）．また，朝鮮の美術展における兄米太郎の出陳はさらに遅く，漸く1944年に朝鮮美展第23回に前掲の国画展に出陳したものと同図と思われる「朝風」「夏日」の2点が確認されるに過ぎない（『毎日新報』，1944.5.30）．この他，兄米太郎による朝鮮における作品発表は，弟米次郎が仁川移住後に編輯・発行した『第五回趣味の蔵書票集』（佐藤，1940b）と，弟米次郎が企画した蔵書票展にそれぞれ1点見られるだけである．

**図2.** 朝鮮風景（A），佐藤米太郎，1935，（佐藤米次郎，1935）個人蔵．

一方弟の米次郎は，朝鮮へ移住する前も，移住後も一貫して版画を精力的に制作し，創作版画と蔵書票の普及に尽力した．また同時に童話や童謡の普及活動にも積極的に関わり，児童文学家らの書籍類や自身が編輯した童話，童謡集等に木版による挿画を配し刊行した．そうした活動の一環として，時局下に京城において蔵書票展の開催も実現を見た．米次郎も自身の移住後の活動を振り返って，「中央及鮮内展に出品せるも，主として版画展出版等にて普及に努め」ているとし（佐藤，1943），内外の官設展にも出品するが，とりわけ創作版画に特化した展覧や出版活動等による普及に重点を置いたとしている．

地理的に近接する京城では，既述のようにすでに1930年前後から朝鮮創作版画会の活動の一環として，創作版画の展覧会や研究会等も開催されていた．一方，仁川は朝鮮への移民が急増した1906年時点で，日本人の移民が釜山（1876年に日本人の入植が始まった最初の地域である）に次いで多く（林，2004），早期から日本人居住地を形成してきたが，管見において，仁川における日本人の版画創作は，佐藤兄弟の活動を除き確認されない．すなわち弟米次郎によって仁川を拠点とした創作版画活動は始動し，1944年に米次郎が応召するまでそれが継続されたのである．

以下に，佐藤米次郎による創作版画活動がどのように展開されたか，1940年1月の移住後から1941年10月の蔵書票展開催前夜まで，そして蔵書票展を経て，同展開催後から1944年に応召するまでの3

つの段階に区分して，時系列的に見ていくこととする．

## 2．仁川移住後から蔵書票展開催前夜まで：1940年 1 月–1941年 9 月

佐藤米次郎は朝鮮に初めて足を踏み入れた1940年「1月20日（土）」に，「初めて踏む朝鮮の地釜山の四囲は内地と大差ない見事な建物ばかりなれど，今なお言語，風習を異にする朝鮮に活せねばならぬ事を思へば些か気が沈む」と心情を吐露し，仁川に移動後には「仁川府浜町の寓居に夢をむすぶ」と記している（佐藤，1940a）．これは，米次郎が移住当初に身を寄せた木村武男（生没不詳）方を指す．そこから同年末には仁川府本町に引っ越し，引揚まで同所を拠点とした．米次郎は移住後に木村用の蔵書票を制作しており（図3），『第五回趣味の蔵書票集』（佐藤，1940b）や玩具の趣味家で版画家である釜山の清永完治（1896–1971）が刊行した創作版画誌『朱美』第4冊（清永，1941），さらに後述の蔵書票展にも同図の出陳が確認される（佐藤，1941c）．なお，清永の『朱美』第1冊から第5冊（清永，1940a–c；1941–1942）やそこに作品を寄せた版画家等については，本稿では生没年など最小限の情報に留め，別稿において詳述する（辻，2017）．

**図3.** 玩具蛇（木村武男用），佐藤米次郎，1940，（佐藤，1940 b）個人蔵．

米次郎は朝鮮に到着時は前掲の様に消沈した様子であったが，「1月24日（水）」には次のように記している．下線は筆者が付した．以下同様とする．

> 建築に，言葉に何一つ不自由を感ぜぬ程．内地に同化された朝鮮仁川の姿を見たその喜びは大きかったが，やはり朝鮮の本然の姿を見ぬ事はさびしい．時折街行く人に鮮語で語り，朝鮮服の姿を見るものの，何となく調和を欠いて見えるのはどうした訳か．内地にいた時の朝鮮の認識が根底から異なっているのだ．聖代の朝鮮の躍進振りをはっきり認識していなかった自分を笑い度なった．

想像していたより，植民統治下の仁川が近代的に変貌を遂げていたことに対する無知を思い知った，というのである．米次郎の朝鮮に対する認識は，青森で兄米太郎をはじめとする朝鮮を題材とした版画等に接してきたことにあると考えている．すなわち，自身が発行する創作版画誌に，仁川の兄米太郎から送達される作品は，前掲の通り卑近な風俗や風景を描いたものであったし（図1，2），そうした題材はその他の創作版画誌はじめ官設展等においても，植民地朝鮮の代名詞となっていた．また信奉する斉藤昌三による衰退した朝鮮を憐れむ言説や（斎藤，1941e），料治朝鳴などによる当地を牧歌的に捉えた言説に接してきたことが，朝鮮に対するイメージの形成に影響を与えたことは想像に難くない．たとえば料治は，「世界中の民族のうち，もっとも詩的な情趣にとんでいる」「悠々として日月のそとに生を楽しんでいるさまは，美しい次第である」と記している（料治，1936）．

その後は，青森に比べ冬が厳しくなく過ごしやすいという印象を持ち，さらに兄米太郎の朝鮮人の友人申命均（シンミョンギュン）（生没不詳）の家族とも交流するなどし（佐藤，1940a），日を追うごとに同地に馴染んでいったようだ．それに伴い同地において盛んに版画の創作活動を展開していく．その皮切りは，大分の版画家武藤完一（1892–1982）が主宰する創作版画誌『九州版画』第21号に寄せた多色木版作品「朝鮮の花売り」（図4）であった．米次郎と，大分の武藤との交流は，双方が主宰する創作版画誌への投稿を通じて1930年代初めから継続している．米次郎は，青森時代には『九州版画』への投稿を，1934年1月刊行

の第2号から開始しており，以後1939年11月刊行の20号まで断続的に作品を寄せている（加治，2005）．仁川移住後も1940年6月刊行の第21号以降，23号及び24号終刊号まで作品を寄せている（武藤，1940；1941a–b）．一方武藤も，大分から米次郎が青森で刊行する『彫刻刀』第12号（1932年7月刊）から，同誌改題後の『陸奥駒』（1933年1月刊–1935年12月刊）や『青森版画』（1939年2月–同年5月）等にほぼ毎号作品を寄せている（加治，2005）．

**図4.** 朝鮮の花売り，佐藤米次郎，1940，（武藤，1940）武藤隼人氏蔵．

さて米次郎は，1940年5月末を寄稿の締め切りとする『九州版画』第21号に「朝鮮の花売り」（図4）を寄せ（注2），作者の言葉を次のように添えている．仁川に移住して5か月になるが，「青森時代の如く版画に打ち込む力が消えた様ですが『九州版画』の熱に動かされてボツボツ何か又やって見る心算です」と，米次郎は仁川における創作版画活動の始動を告げている．そして「朝鮮の花売り」（図4）については次のようにある．「朝鮮色濃い花売りの姿です．さびれ行く朝鮮の姿を版に残して見るつもりです」としている．これ以降米次郎の創作版画活動は一気に加速していった．

『九州版画』第21号への寄稿と同時期に，米次郎は仁川で同地における初めての創作版画の展覧会を開催している．恩地（1940）によれば，「朝鮮に定住した佐藤米次郎君の手で仁川で最初の版画展が催された．五月二五二六両日，仁川公会堂，又同一内容で六月，仁川公立女学校[仁川公立高等女学校（現・仁川女子高等学校）：筆者]．恩地，川上，棟方，武藤，前川，松木，下澤，平塚，関野，今純三氏及佐藤氏の作品及び協会の百景（『新日本百景』のことで，1938年から日本版画協会所属の作家が制作し毎月頒布した．1941年39点までで頓挫した：筆者）中の三十点陳列」とある．また，本展の開催に前後して，前掲の清永の『朱美』第1冊（1940年5月20日刊）（清永，1940a）に仁川の風景を描いた木版作品を寄せている．続いて同年8月には，日本本土や朝鮮在住の日本人の児童文学家による童謡に，日本の子どもの遊戯の様子を捉えた米次郎の版画を添えた童謡版画集『こけしの夢』第1輯（佐藤，1940）を創刊した．

そして1940年12月には，『第五回趣味の蔵書票集』（佐藤，1940b）を刊行する．本集は同年7月に他界した，26年間にわたり京城に居住した愛書家で蔵書票愛好家である堀田和義（1908–1940）の追悼号として刊行した．本輯の構成は，堀田の書票を作った棟方志功（1903–1975）や料治など版画界の重鎮や，堀田が在学した京城中学校の恩師前川為一（生没不詳）などの追悼文を掲載し，堀田の全蔵書票の目録を掲載した．そのうちの蔵書票53点が貼付されている．『趣味の蔵書票集』は，1936年の『第一回趣味の蔵書票集』（佐藤，1936）から毎年1輯ずつ刊行を続けて来たが，堀田の追悼号を以て終刊した．追悼号に掲載された会員名簿によれば（佐藤，1940b），会員45名のうち朝鮮在住の会員は兄米太郎の他，前掲の清永完治，そして京城の版画家尾山清（生没不詳），釜山の野田習之（1918–2002），大邱師範学校の教諭で洋画家の岡田清一（1909?–1998）の名前があり，兄米太郎以外は，いずれも前掲の『朱美』第1冊（清永，1940a）に米次郎と共に作品を発表しており，それ以前の米次郎の出版活動には出陳していないことから，移住後に『朱美』への参加を通して親交を深めたと考えられる（辻，2017）．作家以外の朝鮮在住者は，前掲の恩師前川と仁川の木村武男及び医師廣兼寅雄（生没不詳）の名前を確認でき，やはり移住後の交友関係といえよう．

一方1941年3月に刊行した『こけしの夢』第2輯の私信によれば(佐藤，1941)，同書第1輯の刊行を経て，京城元町小学校校長で童話作家である土生米作［1891–1970；1921年から1946年まで京城に在住した（大分県地方史研究会，1971)］や，出版社仁川社社長西香山(生没不詳)夫人で，野口雨情門下の西葉津香(生没不詳）などと知己になり，彼らの作品を『こけしの夢』第2輯に掲載することになったとしている．

さらに1942年9月刊行の『こけしの夢』第3輯の私信には，『こけしの夢』第1，2輯の刊行の反響について，「僅か五十部の趣味出版にもかかわらず『童謡研究』はじめ『京日小國民新聞』『朝鮮新聞』『朝鮮商工新聞』『仁川（前掲の仁川社が1936年に創刊した月刊誌：筆者)』等に写真入り二段三段見出しで」紹介されたとある（佐藤，1942)．ただこれらの紙誌は，目下管見に入っていない．米次郎は，このように版画創作による版画の普及活動と同時的に児童文学の普及活動を推進し，当地に知己を増やしていった．そして，1941年10月に蔵書票展覧会を企画するに至った．『こけしの夢』第2輯を1941年3月に刊行して以来，蔵書票展開催のため「日時を費やして方々へ御無沙汰はするし版画らしい版画も作れなかった」（佐藤，1942）とするように，それまで積極的に展開していた制作及び普及活動を一旦休止し，同展の開催に没頭している．

### 3．蔵書票展開催の顛末：1941年10月16日–19日

佐藤米次郎が蔵書票展の開催について最初に言及したのは，1941年6月18日と執筆日の記された「第二十回鮮展を見て」（佐藤，1941a）においてである．米次郎は，銅版画の普及に尽力した西田武雄（1894–1961）が編輯・発行する『エッチング』へのこの寄稿が，朝鮮美展或いは同地の創作版画界について書くように西田から依頼されたためと明かし，「半島の版画はこれからだ」とし，次のように記している（佐藤，1941a)．

> 野崎副社長の御厚意で近く朝新紙（朝鮮新聞：筆者）上に朝鮮を知っている中央の版画家の後援を得，朝鮮内の版画人の作品を『朝鮮版画だより』として連載する事になりました．朝鮮で最初の試みですからどれくらい迄続くか二三週間も続いたら多少創作版画の名前位は知らせ得るのではないかと思います．次に今年の十，十一月頃に斉藤昌三様を迎えて小生の念願である蔵書票の展覧会を小奇麗に開く事になりました．

「朝鮮内の版画人」とは，前掲した移住後に交流を深めた『朱美』への寄稿者たちで，清永完治らのことを指していよう．彼らの作品を新聞紙上において紹介していくとある．そしてさらに10，11月ごろに「蔵書票の展覧会」を開催すると最初の告知をしている．

「野崎副社長」とは朝鮮新聞社の野崎真三（生没不詳）のことで，佐藤（1941a）によれば，移住に際して斉藤から旧来の友として紹介を得ていたが，実際に米次郎が対面したのは1941年の朝鮮美展第20回参観のために初めて京城を訪れた時であったという．野崎は1935年から1937年までは同社の「編輯総務」として，1938年から1939年は取締役の1人として記載され，副社長としては1940年から1942年の廃刊まで確認される（東京興信所，1935–1939；同，1940–1942)．『朝鮮新聞』は，仁川に拠点を置く『朝鮮新報』を前身として1908年12月1日から同名に改称し，首都機能の整備が進行しジャーナリズムの拠点となった京城に1919年に移転した．その後は朝鮮における日本人経営の二大新聞として『京城日報』に比肩する発行部数を上げたが（金，2011)，1942年2月29日に「一道一新政策」によって廃刊を余儀なくされた．朝鮮新聞社は読者の獲得と発行部数拡大のために，博覧会などを断続的に主催しており（金，2011)，こうした同社の読者寄りの姿勢が文化面の充実にも反映し，野崎による米次郎の活動に対する支援を円滑にしたと考えられる．同紙が廃刊になった後は，野崎（1943）によれば，朝鮮映

画配給社の常務理事に異動となり，転職の諸事を勉強しているが「六十年の手習で」とあることから，額面通りとすれば1883年頃の生まれで斉藤と同年輩となる．翌1944年も同職を継続していることが確認されるが（野崎，1944），植民統治終焉前後の動静については管見に入ってこない．

米次郎は，時局下に蔵書票展が野崎の「絶大な御援助によって実現された」としている（佐藤，1942a）．具体的には，『朝鮮新聞』紙上における事前の宣伝だけでなく，同社が広告料代わりに配布冊子「招待客用朝鮮紙千枚」並びに「一般鑑賞者用ざら紙ニ千枚」の印刷も請け負ったとしている（佐藤，1988）．また展覧初日の京城中央放送局のラジオ放送で，斉藤による「蔵書票について」と題する講演が実現したのも野崎に負った（佐藤，1942a）［『京城日報』（1941.10.16）に掲載された番組プログラムにも確認される］．斉藤も蔵書票展の開催が，旧友野崎を米次郎に紹介したのが縁でと記している（斉藤，1941c）．すなわち，米次郎が時局下に『朝鮮新聞』紙上における創作版画の普及活動や，官側の後援を取り付け蔵書票展を開催できたことは，正にこの野崎に知遇を得たことによったと言える．

そもそも野崎の名前が当地に現われたのは，管見では『京城日報』（1921.1.5）に掲載された「朝鮮の俚言及び伝説に現われた酉に就て」の執筆が最早期である．その後，『京城日報』（1928.6.9）に，朝鮮創作版画会のメンバーが属していた短詩の会「甕の会」の1人として短詩を寄せている．1929年には，多田毅三の司会による京城日報社主催の日本画中堅作家展についての座談会で，「甕の会」や同会と関係の深い「ゲラ句会」のメンバー（辻，2016a）と共に見識を披露している（『京城日報』，1929.3.20；21；23；24；26）．また米次郎が蔵書票展に先立ち朝鮮美展第20回を参観した折に，同展や朝鮮の美術界に関する野崎の解説で事情が詳細に理解されたと記し（佐藤，1941a），後には野崎を「半島斯界の長老」と紹介しており（佐藤，1942a），野崎が美術に相当造詣が深かったことがわかる．そして多田やその関係者と交流が見られることに鑑み，野崎も1930年前後の多田らによる創作版画の普及活動に対して少なからず知識と理解があったと考えられる．それゆえ時局下にありながら創作版画についての紙上連載を可能にし，蔵書票展の開催に際しては「朝鮮新聞の割愛されたスペースは甚大なもので，時局柄まったく感謝せざるを得ない」（佐藤，1942a）という米次郎の言葉からも，いかに異例の計らいであったかがわかる．ただ1922年以降の『朝鮮新聞』は管見に入っておらず，今後の調査で関係の記事が見つかることを期している．

さて，時局下の蔵書票展とはどのようなものであったか，本展の招待状（佐藤，1941b）及び出陳作品や目録（佐藤，1941c）等により具体的に記していく．本展の招待状（佐藤，1941b）には，会期が1941年10月17日から19日までとあるが，佐藤（1989）によれば，会場である京城三越の好意で1日前倒しとなって開催されたとする．これについては，斉藤も出発前の手記で日程の前倒しに言及していないことから（斉藤，1941a–c），蔵書票展の日程がかなり差し迫ってから確定したとわかる．米次郎は，防空演習の日程が当初予定から前倒しとなり，蔵書票展と重なったために，斉藤の朝鮮訪問やラジオ放送に影響がないかと懸念したと，同展開催後に振り返っている（佐藤，1942a）．

同展は，前掲の通り野崎が副社長を務める京城の朝鮮新聞社と斉藤昌三が社長を務める東京の書物展望社との共催で，後援は朝鮮総督府図書館が担った．ただ朝鮮総督府図書館の同展に関する記録は，管見において館報（『文献報国』）にも確認されない．また，ガラス入り額縁50枚等，一切の経費は米次郎自身が負担した（佐藤，1989），とするように，当局側が積極的に開催を後押ししたのではないようだ．米次郎の言葉を借りるなら（佐藤，1942a），ちょうど会期中に「実践的な第二次防空演習」の最中であり，「時局柄此の種の道楽展はあまり薫しい事ではな」いといった事情によったと推し測ることができる．

米次郎は本展の企画の趣旨を，斉藤が京城を訪れるのを機に，海外に日本の蔵書票を紹介するため斉藤が英文で刊行した『BOOK PLATES IN JAPAN』（斉藤，1941）の収録作品や蒐集品の展示により，日本の蔵書票の認知と普及及び欧米の作品を展覧することと招待状に記している（佐藤，1941b）．また展

示作品は，蔵書票展の開催が自身の長年の心願であったとするように(佐藤，1942a)，斉藤の蒐集品(「日本古代初期蔵書票」6点）の他は，米次郎がこれまでに刊行した蔵書票集や創作版画誌などに掲載した作品及び移住後に制作或いは蒐集したものからなる．そして米次郎は本展に「小品美術展」としての性格を持たせることも狙いとし(佐藤，1942a)，目録や手記などにおいて著名な作家の出陳は「特別後援者」などと特記している．招待状（佐藤，1941b）にも，「特別後援出品者（五十音順)」として，「牛田雞村，織田一磨，太田臨一郎，岡田清一，恩地孝四郎，川上澄生，今純三，佐藤米次郎，下澤木鉢郎，鈴木登三，関野準一郎，武井武雄，高橋友鳳子，平塚運一，広瀬栄一，前川千帆，松木満史，棟方志功，武藤完一，山内神斧，吉田正太郎，料治朝鳴」の22名を上げる（佐藤，1941b)．日本の版画界の大家を網羅した，正に「小品美術展」であった．

「蔵書票展覧会出陳目録」（佐藤，1941c）によれば，具体的な展示数は，「日本現代蔵書票」は額1番から16番，20番から42番まで195点を展示し［内3額20点は少雨荘（斉藤の文庫名）の蔵書票］，『BOOK PLATES IN JAPAN』(斉藤，1941)の全収録作品50点(額数不詳)，「蔵書票専門作家故中田一男(1907–1938：筆者)」の作品は全3額27点（内16点は後援者掘田和義の蔵書票)，さらに斉藤が出品した「日本古代初期蔵書票」6点，中国版画会員である李樺らの「中国現代蔵書票」10点（注3)，及び「欧米蔵書票（独・伊・洪・英・米・和・葡・濠・波等）約七〇点」，総数360点に及ぶ膨大な数であった．各額に5点前後を展示し，額番号は「特別後援者」を番号の前方から並べ，朝鮮や台湾からの出陳は地域ごとにまとめられている．

米次郎は，使用者あっての蔵書票との考えから，展示票には，作者だけでなく使用者を明記した（佐藤，1989)．「蔵書票展覧会出陳目録」にも，額番順に，題名，版種，作者，使用者，及び（　）書きで使用者の略歴を付している（佐藤，1941c)．その記述から朝鮮在住者が制作した蔵書票は，米次郎自身の他，岡田清一，尾山清，野田習之，清永完治，保田素一郎（生没不詳．釜山放送局勤務．『朱美』第1冊に作品を発表している）及び兄米太郎の名前を確認できる．前掲の通り，保田を除き『第五回趣味の蔵書票集』（佐藤，1940b）の会員で，兄米太郎を除き『朱美』第1冊（清永，1940a）の寄稿者である．米次郎と岡田以外は第7額にまとめられており，いずれも自用で「(版画家)」とある．清永らの作品は目録に記された題目から，『朱美』第1冊や『第五回趣味の蔵書票集』などに寄せられた作品である蓋然性が高い．また第25額には岡田の作品5点が集められている．岡田の自用2点の略歴には各々「(鮮展無鑑査)」，「(鮮展作家，洋画家)」とある．岡田は，実際朝鮮美展には1937年第16回から1943年の第22回まで油彩で入選している(朝鮮総督府朝鮮美術展覧会，1937–1940，『毎日新報』，1941.5.25；1942.5.27；1943.5.25)．また岡田による「合谷春人（音楽家)」（1902–?：大邱師範学校教諭）を使用者とする「楽器」は，『第五回趣味の蔵書票集』にも同題で掲載されており（図5）（佐藤，1940b)，これを展示したと思われる．この他は「里見卓郎（大邱医専)」と「吉越吉雄（教育家)」（共に生没不詳）を使用者とする作品であった．

**図5.** 楽器，岡田清一，1940？，(佐藤，1940b）個人蔵．

米次郎の作品については，作品展示の枚数を調整するためか各額に散らばっているが，第29額のみは米次郎の作品からなる．これらの作品のうち，朝鮮在住者が使用者であるものは，前出の木村武男と廣兼寅雄，そして野崎真三の3点である（佐藤，1941c)．木村と廣兼の書票は，記念作品集（佐藤，1941c）の掲載図版によって，既述の『第五回趣味の蔵書票集』（佐藤，

1940b）に掲載されたものと同図と確認できる．野崎に作った蔵書票は，本展の案内状に貼付された佐藤の自票と同様の朝鮮玩具「起き上がりこぼし」を題材としたものである（図6）．既述のように野崎との初対面が前年の朝鮮美展の折であることから（佐藤，1941a），本展開催に際して野崎に作ったものとみる．蔵書票展を経た後も，野崎には『こけしの夢』第4輯（佐藤，1943）を贈呈しており，やはり野崎も版画を嗜好していたと思われる．また米次郎は「起き上がりこぼし」を，本展では日本在住の「廣瀬栄一（蔵書家）」と「田沼敬三（実業家）」にも制作し，また戦後にも制作しており，米次郎にとって愛着のある朝鮮玩具であったようだ．

**図6.** 玩具（野崎真三用），佐藤米次郎，1941（佐藤，1941c）個人蔵．

**図7.** 仁川閣の秋（＊仁川閣三題（夏･秋･冬）の1つ），佐藤米次郎，1942，『思い出の仁川風景絵葉書』（私の歩み）個人蔵．

斉藤昌三は本展開催に前後して，自身が編輯・発行する『書物展望』において逐次言及している（斉藤，1941a–e）．その皮切りが，1941年8月1日発行の同誌において「京城で催す蔵書票展の準備も忙中の閑を利用して着着進捗しているが，佐藤君の熱心に対しても成功させたい」とある（斉藤，1941a）．そして開催後には，今般の様な蔵書票の単独展は「日本としては最初であったと思う」と自負している（斎藤1941e）．米次郎自身も，三越側から1日4000人の参観があったと報告を受け，本展が成功したかは言明できないが，入場者を半分としても8000人が蔵書票について理解したと思われるとする（佐藤，1942a）．このような主催者らの感想から，時局下に開催された同展が概ね満足の行くものであったと窺うことができる．

### 4．蔵書票展開催後の米次郎による創作版画活動の展開：1941年11月–1944年 4 月

佐藤米次郎は蔵書票展に前述の通り一定の手ごたえを得た後，時局下にどのように創作版画の普及活動を展開したか見ていく．まず1942年9月に刊行した『こけしの夢』第3輯の私信（佐藤，1942）により，同展開催後から1942年8月までの活動をたどる．それによれば，「仁川公立高等女学校皇紀二千六百年記念『あららぎ文庫』ノ蔵書票ヲ二種木版ニテ完成」させたとし，米次郎は早速蔵書票の普及活動を展開している．なお本書票については，目下管見に入っておらず，現地調査を継続したい．

そして米次郎は，日本本土及び朝鮮における展覧会にも，仁川を描いた風景などを積極的に発表していることを報告している．日本本土における展覧では，1941年11月の日本版画協会展第10回に「明治大帝御衣奉安殿」「夏の仁川閣（1905年にイギリス人商人の別荘として竣工した洋館．1936年から日本の料亭となった：筆者）」，「仁川閣の秋」の3点を出陳した［東京文化財研究所（2006）では「明治大帝御衣奉安殿」「冬日の仁川閣」「新緑の仁川閣」とある］．また朝鮮美展には，1942年第21回に「仁川閣三題（夏・秋・冬）」（図7）を出陳し［『毎日新報』（1942.5.27）により確認される］，本作はその後，仁川府庁に寄贈されたとしている．

1942年6月には，前年に続き日本版画協会展第11回に「暁の仁川」（=「仁川小月尾島」），「冬の仁川閣」の2点が入選したとする（注4）．米次郎は，これらの作品のほか，「一昨年ノ造型版画協会展発表ノモノ」（注5）等合計8点が仁川郷土館に常設展示され，今後は2か月に1点制作し出陳することになったとしている（佐藤，1942）．常設展示も始まり，より普及に力点を置いたものとなっている．ただ展示施設の仁川郷土館や題材とした仁川閣や歴代天皇ゆかりの建造物などは，朝鮮人の日常からは乖離したものであり，彼らも普及の対象であったとは考えにくい．

**図8.** あめうり（＊橋本興家宛，1944年1月17日の消印），佐藤米次郎，不詳，個人蔵．

さらに，「今年（1942年：筆者）八月八日満洲国朝鮮訪問使節団長臧式毅（ゾウシキキ）［（1884–1956）満洲国成立時には皇帝に推す声もあった高官:筆者］」閣下ガ仁川視察ノ際ニ仁川郷土館出陳中ノ版画『夏の仁川閣』ヲ郷土館ヨリ献上御嘉納ノ光栄ヲ賜ル」としている（佐藤，1942）．また，同年に青年隊（青年動員政策の一環として組織された青年団の下部組織として公立国民学校に組織され，1941年以降は職場にも組織された）の委嘱を受けて「皇軍慰問エハガキ『朝鮮風俗版画ゑはがき』」を制作したとする．本図は管見に入ってこないが，同時期に米次郎が制作した朝鮮子供版画絵葉書（図8）から，戦争とは無関係の朝鮮人の日常を描いたものと思われる．このように仁川においては，米次郎の版画創作が当局側にも認知されていたと分かる．

佐藤（1942）によれば，この他に「大阪・駸々堂刊・蘆谷蘆村先生編輯『童話學校』六冊ノ扉絵」はじめ「稲田新一氏ノ『さくらんぼ』『珊瑚礁』」等の童謡集の装幀や挿絵，また『童謡藝術』，『青森縣文化』，『川柳みちのく』，『民謡部落』といった詩誌等に表紙カットや口絵，挿画を寄せたと記している（注6）．一方『こけしの夢』第3輯への寄稿者については，「上海の米山愛紫，青森の川島健至，北海道の志田十三，大阪の田中好太郎」，「今春京城元町小学校長先生より京畿道視学官に御栄転の土生米作」と紹介し，国内外における地道な活動において幅広いネットワークを形成し維持している．

ついで『こけしの夢』第4輯の私信（佐藤，1943）により，1942年9月から1943年8月までの米次郎の活動をみていく．米次郎は1943年1月下旬に，京城丁子屋百貨店で版画展を開催している．本展については，日本童謡藝術協會（1943）の消息欄にも，「佐藤米次郎氏京城に於て版画個展を開催」と記されている．佐藤米次郎は，1941年の蔵書票展に先立ち，「京城で創作版画展を開く様当地の人々に再三再四すすめられる」（佐藤，1941a）と記している．京城では朝鮮創作版画会が創作版画の普及に奔走した1930年前後に，すでに創作版画を知る人もいたし，1940年前後から官側の意向で日本版画の流入が積極的に行われており（辻，2016a；b），版画に対する知識や需要が少なからずあったと考えられる．しかし米次郎は，「朝鮮の版画界はこれから」と見ており，創作版画を知らない当地の人々に美術品は高ければ売れるという風潮から，高価で売りつけて版画を普及することは不本意として応じなかった（佐藤，1941a）．それから1年余を経て，漸く米次郎が京城で版画展の開催に応じる環境が整ったといえる．

ついで1943年には，日本本土の展覧では国画展第18回に「雪の仁川神社」を出陳し，一方朝鮮美展第22回には「仁川風景」の入選を報告している［東京文化財研究所（2006）及び『毎日新報』（1943.5.25）により確認される］．そして「半島徴兵制実施記念朝鮮童謡版画集『おんどるの夢』第一輯」（佐藤，1943a）の発刊を記している．本集は，佐藤米次郎が制作した朝鮮の子どもの伝統的な遊びを題材とし

**図9.** 板飛び，佐藤米次郎，1943（佐藤，1943a），佐藤光政氏蔵.

**図10.** 石けり，佐藤米次郎，1943（佐藤，1943a），佐藤光政氏蔵.

**図11.** あめうり，佐藤米次郎，1943（佐藤，1943a），佐藤光政氏蔵.

**図12.** コンヂル，佐藤米次郎，1943（佐藤，1943a），佐藤光政氏蔵.

た「板飛び」（図9）「石けり」（図10）「あめうり」（図11）「コンヂル」（図12）の4作に，朝鮮在住の土生米作，田中初夫（元朝鮮楽劇団専属作詞家，朝鮮放送協会嘱託），真田亀久代（慶尚北道慶州市近郊居住，童謡研究・作詩家）及び西葉津香の童謡詩を合わせたものであった．本集に添えられた私信によれば（佐藤，1943a），「恩師童話家蘆谷蘆村先生はじめ児童文学界の人々」から朝鮮の子どもを題材とした版画を依頼されて作ったという．そして徴兵制実施を来年に控え発刊に至ったことを心から喜んでいるとある．ただ，本集自体には「半島徴兵制実施記念」という文言は挿入されておらず，内容も前掲のようにそれと結びついていない（図9–12）．米次郎は，本集に前後して刊行した童謡版画集『こけしの夢』第4輯の私信（佐藤，1943）で，「小生の版画もお国のお役に立つのか今般日本版画奉公会設立と共に会員に推挙され，今又日本版画協会会員に押されるの光栄を賜りました（略）」，そして不肖ながら許される範囲で懸命の努力を尽くすと記している．すなわち『おんどるの夢』第1輯の発刊に前後して報国の任を負ったことが，それに「半島徴兵制実施記念」という文言を添えさせたとも考えられる．

一方「『おんどるの夢』第一輯」とあるが，本集の題字を武井武雄が第5輯分まで揮毫していることから（図13），『こけしの夢』のように継続する予定であったようだ．しかし，翌年には自身も応召し，愈々決戦下の体制も厳しいものとなり頓挫したものと思われる．ただ，童謡版画集の刊行は頓挫したも

**図13.** 『おんどるの夢』の題字，武井武雄，1943，佐藤光政氏蔵．

**図14.** チェギ，佐藤米次郎，1944，『朝鮮』2月号の扉絵（朝鮮総督府，1944）．

のの，米次郎は本集の刊行と前後して1943年5月から翌年4月の応召まで，朝鮮総督府機関誌『朝鮮』の扉絵に朝鮮の子どもの遊びを描いた版画を寄せている．5，6月号は「ぶらんこ」，7から9月号は「角力」，10から12月号は「板飛び」（図9と同構図），翌年2から4月号は「チェギ」（図14）であった．米次郎は，これらを『おんどるの夢』の掲載図版として制作し，順次刊行する予定であったのではないかと考えている．

さて，佐藤（1943）によれば，「愛国婦人会始祖故奥村五百子記念館建設期成会の委嘱により『奥村五百子刀自版画像』を完成」したと記している．そして9月30日に「鮮満支蒙に御巡錫のため御来鮮の東本願寺御門跡様恩裏方様に故奥村五百子刀自長女敏子先生（現在七十一才の御高齢にて京城徳風幼稚園主として半島幼児の薫育をして居られる）が，拙作『明治大帝御意奉安殿』『大正天皇御聖蹟』及び『おんどるの夢』第一輯を献上御嘉納の光栄を賜る」とある．奥村五百子（1845–1907）は，1896年に光州に実業学校を創設し，1901年には愛国婦人会を創設した社会運動家である．東京文化財研究所（2006）によれば，米次郎は1944年の国画展第19回展に「奥村五百子刀自版画像」を出陳している．このように時局下に当局側の活動にも米次郎の版画が重用されたことは，米次郎が同地において創作版画活動と児童文学の普及を積極的に展開してきたこと，及びその成果を当局側が認めていたこと，また仁川のみならず京城の文化人にもそうした活動が認知された証左といえよう．

米次郎は，『こけしの夢』第3，4輯の贈呈者を各輯に記して謝意を表している．とくに第4輯では，第3輯で混在していた記述を「鮮内」として別記するほど朝鮮在住の贈呈者が増加している．第4輯には，「◎土生米作◎岩本正二◎遠田運雄（洋画家，朝鮮美術界の重鎮：筆者）◎野々村修瀛（仁川公立高等女学校長：筆者）◎奥村敏子◎西葉津香◎田中初夫◎真田亀久代◎野崎真三」（佐藤，1943）の9名が記されている．第3輯では土生と西の2名であった（佐藤，1942）．同地において着実に交友関係を広げていったことがわかる．しかし，移住当初から終焉を迎えるまで，一貫して日本人のネットワークを出ることはなかった．

さて，佐藤（1943）によれば，第3輯刊行後（1942年9月）に米次郎の版画・執筆が紹介された紙誌は，『仁川』，『京日小國民新聞』，前掲の表紙絵（図14）を寄せた『朝鮮』，また「『川柳朝鮮』（京城），『文化朝鮮』（鮮鉄）（＝朝鮮鉄道株式会社：筆者），『城大學報（京城帝國大學報：筆者）』（城大）」とある．また日本本土では「『書物展望』（東京），『さくらんぼ』（大阪），『童謡藝術』（大阪），『月刊東奥』（青森），『青森縣文化』（青森），『（川柳：筆者）みちのく』（青森），『民謡部落』（青森）」をあげており（佐

藤，1943)，前年と同様の活動を継続していたことがわかる（注7)．

米次郎は既述の様に1944年4月に応召し，京城龍山部隊に入営し，縫工兵として事務室勤務となったが，7月には除隊している．敗戦後は，仁川府庁長室に飾ってあった朝鮮美展第21回入選作品「仁川閣三題（夏・秋・冬)」が米軍将校の目に留まったことがきっかけとなり，日本人世話会の取りまとめ役を命じられた（佐藤，1989)．そして1946年3月に，同地最後の引揚船で帰国している（佐藤，1989)．

## 5．おわりに

おわりにかえて，佐藤米次郎の創作版画活動の意義について，当局側の反応などを踏まえて考察し，また今後の課題についても記しておきたい．

本稿でたどった，仁川を拠点とした米次郎の創作版画活動は，ちょうど京城に日本版画が盛んに流入した時期と重なる．植民統治の中枢であった京城では，当局側の意向に従い日本版画の受け入れに終始し，同地からは一部の版画家を除き発信することはなかった（辻，2016b)．一方米次郎は，時局下に仁川を拠点に積極的に創作版画の普及活動を展開し，日本本土や朝鮮において，主に同地の風景を題材とした作品を断続的に発表した．しかしながら，その活動の対象とされたのは同地に形成された日本人のネットワークであった．また日本本土の既存のネットワークとの関わりを敬重し，そこに朝鮮人の参加は見られなかった．

米次郎の活動は，芸術としての創作版画の普及に主眼を置いて展開していた．時局下に企画した蔵書票展に版画界の大家の作品を展示することによって，「小品美術展」としての意義も加味したことはその好事例であった．米次郎自身も，時局下の蔵書票展を「此の種の道楽展」（佐藤，1942a）と自認し，また一連の版画集の刊行にあたっては，「大東亜戦下この種出版はどうかと思わぬでも」ない（佐藤，1942）等と記している．一方で，米次郎は委嘱を受けて時局にまつわる図版も制作し，自らも歴代天皇にゆかりの建造物を題材とした作品等（「明治大帝御意奉安殿」「大正天皇御聖蹟」「奥村五百子刀自版画像」）も手掛けている．そして日本版画奉公会の会員となり，朝鮮童謡版画集『おんどるの夢』（佐藤，1943a）の刊行を知己に報告する際には，「半島徴兵制実施記念」の文言を冠した．しかし，そこに描かれた朝鮮の子どもに米次郎が向けたまなざしは，日本の子どもに向けたそれと異なるものではなかった．また，移住当初から題材としていた仁川の風景描写も一貫して変わることはなかった．

米次郎は『こけしの夢』第4輯に添えた私信に，「年に一度でもよいから，なつかしい故郷の土に友に親しみたい」（佐藤，1943）と記し，「初旅」と題し近影を貼付して知己に送付している．米次郎や版画家にとって創作版画の味わいはどのようなものであったか．それは同郷で同年輩の版画家関野準一郎（1914–1988）の言説に窺うことができる．関野（1935）は，郷土玩具や木版画の味わいをその土地の「地理的歴史的な香」のしみ込んだものとする．すなわち，米次郎の創作版画は郷土日本や故郷青森の「地理的歴史的な香」に培われ，それを具現化したものであり，米次郎の視線の先には終始日本の原風景があった．そのため日本人のネットワークを出ることはなく，同地の人々にお仕着せに普及することもなかったのではないか．

戦後に仁川時代を懐かしんで刊行した版画集『おんどるの夢』（佐藤，1964）は，前年（1963年）に「仁川の友S氏[佐藤が仁川移住後に最初に訪問した兄米太郎の友人申命均（シンミョンギュン）（佐藤，1940a）と思われる：筆者]から戦後初めてのお便りを頂き，以来旧知との文通が出来，仁川作家展に私の版画が出陳され」たとある．すなわち，米次郎も仁川の作家として同地の人々に認識されたと捉えることができ，それは，時局下の活動が当局側の意向とは乖離した，純粋な芸術としての創作版画の普及活動であったからといえるのではないか．当局側が，1944年に決戦下の美術活動を統括する中で，版画について，「いろいろの意味に於て（版画が：筆者）意義もあり役に立とうと思うが，努力する者の無いのは如何なる理由による

のであろうか」（京城日報社，1944）と憤りを見せたことは，そうした活動が意に沿わないものであったことを示唆していよう．

今後の課題として，米次郎が仁川に移住後早々に主宰した仁川最初の版画展（1940年5月）の作品や仁川公立高等女学校に制作した蔵書票，そして戦後の仁川作家展における展示作品の詳細等，管見に入っていない資料について引き続き調査を続けたいと考えている．

**謝辞**

本研究は科研費15K02181の助成を受けたものです．

本稿の作成に当たり，下記の機関並びに個人の皆様にご協力ご指導を賜りました．ここに記して深く感謝申し上げます（敬称略）．

成均館大学校　金炫淑，徳成女子大学校　権幸佳，ナムアート画廊　金鎮夏，北海道立函館美術館　井内佳津恵，佐藤光政，渡辺淑寛，河野実，町田市立国際版画美術館　滝沢恭司，版画堂　樋口良一，入江一子，武藤隼人，神奈川県立近代美術館葉山館　李美那，東京都現代美術館，畑山康之，千葉市美術館　西山純子，名古屋大学情報・言語合同図書室，兵庫県立美術館　鈴木慈子，和歌山県立近代美術館　植野比佐見，国立国会図書館関西館，鹿児島県歴史資料センター黎明館．

**注記**

1. 兄米太郎が日本本土の創作版画誌に発表した作品は次の通りである．（刊行年），題目，誌名，巻号の順に記した．（1932）「朝鮮の便り」『彫刻刀』17，（1933）「朝鮮女」『白と黒』31（＊前掲2図は同図），「蘇武」『陸奥駒』1，「朝鮮・洗濯女の図」同4，「憩いるチゲ君」同5，「朝鮮風俗ムリチゲ」同6，「ムリッケ」同7，「洗濯女（朝鮮風俗）」『版芸術』15，（1934）「牛」『陸奥駒』8，「朝鮮風俗」同10，「朝鮮風景」同12，「朝鮮風景」同14，（1935）「朝鮮風景（A）」（「作者の言葉」有）」『陸奥駒』17，「朝鮮男文人（自票）」同18，「朝鮮風景」同20，「朝鮮風俗」『不那の木』4，（1936）「鮮婦（自票）」『日本蔵書票協会第四蔵票集』，（1939）「朝鮮風俗」『青森版画』1，「蔵書票（夢人庵）」同2.
2. 『九州版画』第20号（武藤，1939）に，次号第21号への作品の受付は，5月末日を締め切りとすることが記されており，米次郎はそれ以前に版画を創作し作品を送付したと考えられる．
3. 中国の書票は，佐藤（1936）に「中国版画協会員」の寄贈を得た旨が記されている．佐藤（1937）にも中国版画協会員が寄せた作品を掲載しており，これらを展示したと考えられる．佐藤（1988）によれば，両集について「当時として珍しく支那の版画家李樺，頼少其，陳仲綱らが参加してくれ，これが『蔵書票日支交流の始め』と言われたのには驚きもし，嬉しくもありました」としている．
4. 東京文化財研究所（2006）によれば「仁川の朝」「雪の仁川閣」とあり，米次郎が戦後に刊行した絵葉書では「大正天皇聖蹟碑」「仁川小月尾島」とあるが，いずれも同じ作品に異なる題目を付したとみる．
5. 「一昨年」の造型版画協会展に発表したものとあるが，加治（2009）によれば，1940年第4回に米次郎の作品は確認されず，1941年4月第5回に佐藤の作品「仁川風景A–G」があり，これを指すと思われる．
6. 1941年刊行の『童話學校』（駸々堂刊）は，「一年生」（須古清著），「コトリノウタ」（1，2年生向き，本冊のみ1942年に改訂）（須古清著），「三年生」（花戸久子著），「四年生」（田辺善一著），「五年生」（花岡大学著），「六年生」（和田機衣著）の扉に米次郎の多色木版画がある．管見に入った1942年3月刊行『さくらんぼ』第2冊（桜桃童謡詩社）には，表紙，口絵（作品貼付）などを提供している．同年11月刊行『民謡部落』第22輯（川島健至編輯，民謡部落社）にも版画小品が貼付され，あとがきでは『こけしの夢』第3輯の刊行が告知されている．これらの木版画は，いずれも日本の子どもを題材とした．『青森縣文化』（青森縣立図書館編刊）は，米次郎の単色木版による郷土玩具の陸奥駒2種が，1942年第8号から1944年第3号まで表紙を飾っている．当該期間の『川柳みちのく』（工藤禮作編輯，川柳みちのく吟社）は管見に入っていないが，移住前に木版ではないが表紙画を提供している．『童謡藝術』（日本童謡藝術協會）には，6巻11号（1941年11月刊行）の扉絵及び7巻3号（1942年3月）の表紙絵に木版画を寄せている．また7巻7号（1942年7月）で

は朝鮮美展の入選について，8巻3号（1943年3月）では本文で後述する京城での個展の開催について記されている（日本童謡藝術協會，1943）.

7. 『月刊東奥』（東奥日報社編刊）には，1941年2月号，1943年7月号に扉絵を寄せ，1942年9月号に日本版画協会展第11回に入選した「暁の仁川」が口絵写真の1つとして掲載されている．『京日小國民新聞』『朝鮮商工新聞』『仁川』『朝鮮新聞』『川柳仁川』は管見に入らず，『文化朝鮮』『京城帝國大學報』『書物展望』には，関係の記述は見つけられず，引き続き調査したい．佐藤（1948）に，仁川社の雑誌『仁川』に表紙画を寄せていたことが記されている.

## 引用文献


恩地孝四郎（1940）*日本版画協会々報*，**34**，日本版画協会.

大分県地方史研究会（1971）*大分県地方史*，**61**，102．大分県地方史研究会.

加治幸子（2005）*創作版画誌の系譜　総目次及び作品図版：1905–1944年*，中央公論美術出版社.

加治幸子（2009）造型版画協会の航跡．*生誕100年小野忠重展（図録）*，99–104．町田市立国際版画美術館.

清永完治（1940a–c）*朱美*，第1冊–第3冊．朱美の会.

清永完治（1941–1942）*朱美*，第4冊–第5冊．朱美の会.

京城日報社（1915–1945）*京城日報*，京城日報社.

京城日報社（1944）*朝鮮年鑑〈昭和二十年版〉*，京城日報社.

金鎮夏（2007）*나무거울—출판미술로본한국근・현대목판화 1883–2007*，우리미술연구소.

金泰賢（2011）*朝鮮における在留日本人社会と日本人経営新聞*，神戸大学大学院文化学研究科社会文化専攻（博士論文）.

斉藤昌三（1929）*蔵書票の話*，文芸市場社.

斉藤昌三（1941）*BOOK PLATES IN JAPAN*，明治書院.

斉藤昌三（1941a–d）*書物展望*，**122–125**，書物展望社.

斉藤昌三（1941e）続銀魚部隊（十四）．*書物展望*，**125**，75–77．書物展望社.

佐藤米次郎（1932）*彫刻刀*，**17**，青森創作版画研究会.

佐藤米次郎（1935）*陸奥駒*，**17**，夢人社.

佐藤米次郎（1936）*第一回趣味の蔵書票集*，夢人社.

佐藤米次郎（1937）*第二回趣味の蔵書票集*，夢人社.

佐藤米次郎（1940–1943）*（童謡版画集）こけしの夢*，第**1**輯–第**4**輯，私家版.

佐藤米次郎（1940a）朝鮮だより．*エッチング*，**87**，10．日本エッチング研究所.

佐藤米次郎（1940b）*第五回趣味の蔵書票集*，終刊号，夢人社.

佐藤米次郎（1941a）第二十回鮮展を見て．*エッチング*，**102**，5–6．日本エッチング研究所.

佐藤米次郎（1941b）*蔵書票展覧会招待状*.

佐藤米次郎（1941c）*蔵書票展覧会記念蔵書票作品集*.

佐藤米次郎（1942a）蔵書票展覧会を終えて．*エッチング*，**108**，15．日本エッチング研究所.

佐藤米次郎（1943a）*（朝鮮童謡版画集）おんどるの夢*，第**1**輯，私家版.

佐藤米次郎（1948）郷土愛の結晶．*二豊随筆*，**1**（**11**），10–11．二豊随筆社.

佐藤米次郎（1964）*おんどるの夢*，私家版.

佐藤米次郎（1988）えきす・りぶりす生活55年蔵書票自分史（戦前篇1）．*これくしょん*，**7**，3–7．吾八書房.

佐藤米次郎（1989）えきす・りぶりす生活55年蔵書票自分史（戦前篇2）．*これくしょん*，**8**，3–8．吾八書房.

佐藤米太郎（1935）作者の言葉．*陸奥駒*，**17**．夢人社.

関野準一郎（1935）郷土玩具を木版の画材として．*陸奥駒*，**17**，夢人社.

朝鮮総督府（1942–1945）*朝鮮*，朝鮮総督府.

朝鮮総督府朝鮮美術展覧会（1922–1940）*朝鮮美術展覧会図録（第1回–第19回）*，朝鮮総督府朝鮮美術展覧会.

辻千春（2006）日本統治期の台湾における蔵書票の展開．*中京女子大学アジア文化研究所論集*，**7**，13–39．中京女子大学.

辻千春（2007）台湾における蔵書票－戦後の展開を中心に．*中京女子大学アジア文化研究所論集*，**8**，23–42．中京女子大学．
辻千春（2015）植民地期朝鮮における創作版画の展開―「朝鮮創作版画会」の活動を中心に―．*名古屋大学博物館報告*，**30**，37–55．名古屋大学博物館．
辻千春（2016a）植民地期朝鮮における創作版画の展開（2）京城における日本人の活動と「朝鮮創作版画会」の顛末．*名古屋大学博物館報告*，**31**，25–44．名古屋大学博物館．
辻千春（2016b）植民地期朝鮮における創作版画の展開（3）京城における「朝鮮創作版画会」解散後の展開と「日本版画」の流入．*名古屋大学博物館報告*，**31**，45–61．名古屋大学博物館．
辻千春（2017）植民地期朝鮮における創作版画の展開（5）釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱美』の刊行について．*名古屋大学博物館報告*，**32**，63–78．名古屋大学博物館．
東京興信所（1935–1939）*銀行会社要録（39版–43版）*，東京興信所．
東京興信所（1940–1942）*全国銀行会社要録（44版–46版）*，東京興信所．
東京文化財研究所（2006）*昭和期美術展覧会出品目録（戦前篇）*，中央公論美術出版．
西川輝昭他（2007）第9回名古屋大学博物館企画展記録　本に貼られた小さな美の世界　蔵書票．*名古屋大学博物館報告*，**23**，177–201．名古屋大学博物館．
日本童謡藝術協會（1943）*童謡藝術*，**8**（**3**），33．日本童謡藝術協會．
野崎真三（1943）誌上交驩．*朝鮮公論*，改巻**2**（**6**），120．朝鮮公論社．
野崎真三（1944）三つの手紙．*朝鮮公論*，改巻**3**（**4**），31–33．朝鮮公論社．
林廣茂（2004）*幻の三中井百貨店～朝鮮を席巻した近江商人・百貨店王の攻防～*，晩聲社．
毎日新報社（1941–1944）*毎日新報（매일신보）*，毎日新報社．
武藤完一（1939）*九州版画*，**20**，九州版画協会．
武藤完一（1940）*九州版画*，**21**，九州版画協会．
武藤完一（1941a–b）*九州版画*，**23–24**，九州版画協会．
料治朝鳴（1933）*白と黒*，**31**，白と黒社．
料治朝鳴（1936）朝鮮土俗玩具集（全国郷土玩具集16）．*版芸術*，**53**，白と黒社．